

令和 3 年 5 月 20 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18H00780

研究課題名(和文) 日常学としての民俗学 の創発性 世相史的日常/日常実践/生活財生態学の国際協働

研究課題名(英文) The Emergence of Folkloristics as "Everydayness Studies" in East Asia

研究代表者

岩本 通弥 (IWAMOTO, MICHIIYA)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：60192506

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は日中韓の民俗学が、もう一方の極にあるドイツ民俗学の市民運動的実践との協働性や、その鍵概念の「日常」を、いかにして包摂できるのか、各国の異なる蓄積や方法を組み合わせることで、創発的にこれを検討した。韓国では普通の人びとの生活財を悉皆調査で記録化し、そこに暮らし向きを読み解く生活財生態学が盛んである。一方、中国では口承研究に特化し、生活世界や日常実践に焦点を当てる研究が強みを発揮している。これらに対し、日本の日常研究は比較的タイムスパンの長い、生活変化を捉えようとする世相史的な民俗学が発達してきたといえ、3者に接合によって、非ナショナルな、地域分権的な市民本位の民俗学への転換を志向した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来の伝統志向的な民俗学の桎梏から解き放たれた、「いま・ここ」にある人びとの「生」を、丸ごと「生きるための技法」として捉える、新たな民俗学への転換を提起した。東アジアでは1990年代、民俗学の文化遺産学化が進んだが、それとはまなざしの180度逆転した「日常Alltag」という観点を導入することで、その生活や文化、日常を、ミクロな視点や同時代の世相や社会との絡みの中で捉えることを可能にした。日常学としての民俗学を創造してみた。民俗学は地方のローカルな文化を対象とするのではなく、普通の人びとの在り来りたる暮らし方や生き方を正視する科学として、再定立することで、その社会的意義をより明瞭にした。

研究成果の概要(英文)：In this study, we considered whether the East Asian folkloristics of Japan, China, and Korea can collaborate with the civic movement practices of German folkloristics, as well as examine the extent to which the key concept of the everydayness (Alltag) could be embraced. Korean folkloristics has provided exhaustive surveys of the belongings of ordinary people in studying their circumstances through the study of ecology of living goods. Chinese folkloristics has specialized in research on the oral tradition, and has demonstrated its strength in research on the world of day-to-day life and practice. On the other hand, Japanese folkloristics has studied of everydayness which have a relatively long time span and try to capture the historical changes in the ordinary people's lives, have been developed. By joining the East Asian three folkloristics, we attempted to transform into a non-national decentralized and citizen-oriented folkloristics.

研究分野：人文学

キーワード：日常学 民俗学 世相史的日常 生活財生態学 日常実践 ヴァナキュラー ナラティブ 生活変化

1. 研究開始当初の背景

(1) 2003年開催の第32回 UNESCO 総会において、無形文化遺産の保護に関する条約(以下、ICH 条約)採択されると、日中韓では多くの民俗学者がリスト記載のための調査に「動員」されるようになった。衰退する地方や少数民族居住地区の地域おこしのため、ローカルな民俗文化を審美的に価値づけ、グレードアップ化し、観光資源として流用できる「権威付けの装置」の役目を強いられた。これに対し、2013年に世界で153番目の条約締結国となったドイツが、国内での徹底的な熟議の末、揉めに揉んで初めて記載案件としたのが、「協同組合において共同利益を形にするという思想と実践」であった。ナショナルなレベルに限定されず、東アジアにおける観光資源化や国家ブランド化に「回収」されやすい案件とは180度、質の異なるものだった。

(2) 一方、東アジアにおける ICH の状況は、多くの物件をリスト化することが目的化されたようで、日中韓の間で、激しい登載競争も巻き起こった(これに伴って特に中国と韓国の間で、起源論争が引き続き発生したように、ナショナリズム高揚の起因ともなっている)。2008年までに登載された代表リスト90件のうちの32%を東アジア3国のものが占めたのをはじめ、2009年に記載された76件の新規代表リストのうち80.2%が3国のものであったことから(中国22件、日本13件、韓国5件)その偏在が問題となった。翌2010年、1カ国の件数を制限する案が浮上し、以降、是正されてきたとはいえ、現在の代表リスト492件のうちの17.3%が東アジア3国で占めている(中国42件、日本22件、韓国21件、2020年12月現在)。制限が加わることで、記載されたものと記載されていないものの区別が明確となり、記載の有無により ICH 間には何ら格差はないとする当初の理念は崩れ、いわば世界遺産化した結果、人類にとって普遍的な価値をものという優品主義化し、民俗学を持つ理念とは合わないところも出てきている。民俗学理論への ICH 条約の浸透と混濁化、すなわち「文化遺産学化した民俗学」は、必然的に民俗学の変質をもたらしてゆけが、いずれ遺産ブームは冷め、ブームが消え去ったとき、ICH と混濁化した民俗学自体も消滅してしまうのではないかと、東アジアの民俗学内部では、各国に共有化した危機感が広がっている。

2. 研究の目的

(1) 国家ブランド化や観光資源化に「動員」「回収」される傾向の強い東アジアの学的状況に対して、中央集権的でなく、リージョナルに分散する市民本位の文化政策や、住民主体のガバナビリティを重視しているドイツ民俗学のあり方を一つの参照にして、「文化遺産学化した民俗学」のまなざし(サルベージ民俗学とも揶揄されるように、鄙びた、何ら、とりえのないところから、「財」を発掘する視線)とは、視角を180度転回させた日常学としての民俗学を、構想、構築することを、本研究課題の第一の目的とする。換言すれば、ドイツ民俗学の鍵概念である日常 Alltag を、東アジア民俗学に包摂できるよう、そのプラットフォーム作りをすることに尽きている。

(2) その目的は新たな日常学の構築であって、単純なドイツ民俗学の Alltag 概念の受け売りではない。日中韓でも、これまで日常の萌芽的な研究は存在したのであり、それぞれの知的蓄積に、いかに理論的にすり合わせを行ってゆけるのかが問われているといえる。中国では漢族の口承研究の研究蓄積を生かし、生活世界研究を哲学的にも深化させているのと同時に、アメリカ民俗学由来のパフォーマンス理論を仲介し、ゴフマンやセルトーの日常実践に焦点を当てた研究が盛んである。これに対し、博物館事業の急展開によって、韓国では当たり前前の現代の日常を、モノを悉皆的に記録集積させ、「普通の人びと」の生き方として把握する、サルリムサリ研究が蓄積している。サルリムサリ研究とは、サルリムという生きるの名詞形に接尾辞サリを付したもので、日本語に意識すれば、暮らし向き研究あるいは生き方研究(生活財生態学研究)に相当する。一方、日本の民俗学に特徴的な日常研究は、柳田國男の『明治大正史世相篇』にみるような、タイムスパンの長い、長期的な歴史的文化的な拘束から、現在を捉える研究であり、世相史的日常と名付けておくと、3者の異なる民俗学の系譜を、日常を基軸に、整理・検討し、ある意味、統合・昇華させることが目的となろう。

(3) 換言しつつ総括すると、本研究は日・中・韓の東アジアの民俗学が、ドイツ民俗学における市民運動的実践や、その鍵概念である日常を受容する際に問題化してきた、それぞれの包摂の相違を創発的に協働させることにより、東アジアに日常学としての民俗学の確たる基盤を構築することを目的とする。

3. 研究の方法

(1) ドイツ民俗学の日常概念を受容するため、日中韓の民俗学の理論的「地ならし」を行う必要から、複数回、国際シンポジウムを開催し、日常概念のほか、アメリカ流のヴァナキュラー概念などとの接合を試みる。ドイツやアメリカからそれに熟知した研究者を招聘して、直接、東アジア3国の研究者と交流させることがより効果的な刺激となるだろう。

(2) 同様に、ドイツ流の日常概念と、アメリカ流のヴァナキュラー概念を包摂し、東アジアの民俗学に理論的に融合させ、「地ならし」を行う必要から、日中韓3カ国語を同時掲載した研究交流雑誌『日常と文化』を6号(2018年10月)・7号(2019年10月)・8号(2020年10月)・9号(2021年3月)を刊行するこ

とによって、その促進、普及を図ってゆく。

(3) これらの理論的「地ならし」を、普及・促進するために、東京大学のWEB-PARK上に、ホームページを開設し、『日常と文化』掲載の論文等を公開するなど、広報に努めた。中でも今期の方法として、柳田國男『明治大正史世相篇』の注解を、WEB上に公開することは特筆されよう。

(4) ドイツ民俗学の現状を摂取するため、メンバーの何人かは複数回、ドイツおよび北欧における現地調査を重ねたほか(ただし、最終年度はコロナ禍により大幅に縮小せざるを得なかった) 2018年10月14日には、ドイツ民俗学会との学术交流を、第70回日本民俗学会年会の席上において実現した。形態は日本民俗学会・ドイツ民俗学会共催国際シンポジウム「ドイツ民俗学の最前線」であるが、本科研メンバーの多くが、これに主体的に参加することで、方法的により研磨する。

(5) これらの方法の総まとめとして、前期の科研研究会も引き継いだ総決算として、日常学としての民俗学がよくわかるような、学部初学者用の教科書を刊行することを計画する。そのための準備、編集作業において、より洗練したものが琢磨されていこう。

(6) 付記として、世界民俗学研究センター(The Center for World Folkloristics)が、2019年4月より関西学院大学に、学内特定プロジェクトとして開設された(設置期間は2024年3月まで)。この機関との協働関係を促進し、「世界民俗学(World Vernacular Studies)」の構築に向けて、その一つとしての日常学としての民俗学を推進・発信してゆくが、基盤的なインフラストラクチャーとして活用されよう。同センター長には研究分担者の島村恭則が就任し、研究員に山泰幸、客員研究員に岩本通弥・周星が参画している。

4. 研究成果

(1) 日中韓の民俗学は、同じ日常研究でも相互に異質な特徴を有しており、その協働は、社会編成を攪乱しつつ現働化する日常という新たな領域を創成的に開拓するが、本科研では全体をA班からD班の4つに区分して、これに対応した。A班は世相=生活変化研究班であり、3年間に16回の研究会を開催し、柳田國男『明治大正史世相篇』の注解付けを行った。第1章の校註作業は終了し、WEB上に公開した。柳田の世相篇は社会学者をはじめ、多くの論者によって積極的に評価されているが、私たちはこれを精読することによって、果たして先行研究がこれを正しく読めてきたのだろうか、改めて問題提起を行った。この作業によって、いずれ著わされるであろう昭和平成史世相篇の基礎をも提供できたと考えている。

(2) B班はモノ・コト=生活財生態学研究班であるが、成城大学・小島孝夫教授を代表者とする科研費基盤研究B「生活変化/生活改善/生活世界の民俗学的研究 日中韓を軸とした東アジアの比較から」と協働し、生活変化=改善研究会を開催して、ゲストスピーカーとして広島大学久井英輔准教授を招くなど、社会教育や近代史研究との接点を探った。研究成果はいずれWEBで(小島科研の方で)公開される予定である。また生活財生態学、すなわち韓国のサルリムサリ研究に関しては、『日常と文化』誌の第2号で、金賢貞「韓国民俗学は「当たり前」を捉えようか 韓国国立民俗博物館の二つの民俗誌(2007~14年)を中心に」が総括を行っているが、より理論化した研究批評を、いずれ岩本が論文化する予定である。

(3) C班は語り・日常実践=生活世界研究班であるが、ドイツ民俗学の「日常の語り」研究の動向を紹介しつつ、従来の民俗学の範囲を超える語り研究の展望を、2020年4月に上梓した、岩本通弥編『方法としての語り 民俗学をこえて』ミネルヴァ書房にまとめておいた。『日常と文化』誌にもまた、ドイツで「日常の語り」研究を牽引してきたアルブレヒト・レーマンの翻訳をはじめ、関連する論考が複数掲載された。

(4) D班は市民・公民=新しい公共研究班であり、ドイツ社会科学で流通する社会文化Soziokultur概念を受容する基盤について議論した。前掲『方法としての語り』の中でも詳論したが、リージョナルに分散する市民本位の文化政策や、住民主体のガバナビリティを構築する主要概念社会文化を、実例をあげながら紹介した。後述する新しい民俗学教科書『民俗学の思考法』でも、山泰幸によって「災害多発時代に命と暮らしを守る 防災・減災と復興」「超高齢時代のまちづくり 地域コミュニティと場づくり」の2章が割かれており、また近日中に山泰幸によって、新しい公共をめぐる民俗学に関しては、新たな一冊にまとめられる予定である。門田岳久も佐渡において実践中であり、いくつかの論稿が著わされていることは、後述の主な発表論文等で触れてある。

(5) ドイツにおける 社会 文化 Soziokultur 概念は、市民が複数のフェライン (Verein、市民協会) 的活動を日々実践することで、基底的な市民社会や民主主義を構築するための動的な実践的概念であり、その際、日常を問うことは、自らの足元を照射し、自省することを意味している。私たちはドイツの市民運動的実践との関係性を一つの雛型にすることで、その実践の中から当面の目標や意義を学び、外部世界との交流が激化するグローバル化の中で、外部資本や外部運動家に翻弄されがちな地域社会における市民生活や、民俗文化に関わる重層的実践の中において、住民主体のガバナビリティをいかに築いてゆけるか、その内実を場面場面で見極めて対応してゆかなければならない。社会 文化 や 日常 とは、こうした実践的な概念でもあり、それを特徴とすることが明らかになった。

(6) 2018年10月14日に、日本民俗学会・ドイツ民俗学会共催で開催された、国際シンポジウム「ドイツ民俗学の最前線」のドイツ人民俗学者8名とのディスカッションに、本研究会メンバーの多くがコメンテータとして主導的に参与した。その内容は『日本民俗学』第299号(2019年8月)に掲載されている。なお、この国際シンポジウムは、2016年にミュンヘンで開催された Deutsche Gesellschaft fuer Volkskunde/Folklore Society of Japan Joint Symposium "Perspectives and Positions of Cultural and Folklore Studies in Japan and Germany" に対する答礼の招聘シンポジウムである。

(7) 本科研で最も大きなイベントとなったのは、2年目の2019年7月6日・7日に、韓国・春川市、翰林大学で行った国際シンポジウム「ポスト帝国の文化権力とヴァナキュラー 民俗学から日常を問う」である。日本からはメンバー2人を含む3人が発表者として、コメンテータとして3名、オブザーバーが1名参加した。岩本の「東アジア民俗学の再定立」と島村の「ディオニソスとヴァナキュラー」は論文化され、韓国語として『実践民俗学研究』35号、および翰林大学日本学研究所編『文化権力とヴァナキュラー』小花社に掲載されたほか、日本語訳と中国語訳は『日常と文化』第9号に掲載した。

(8) 2021年3月6日に、最後のまとめとしてシンポジウム「家族・日韓・日常学 民俗学を展望する」と題したミニシンポジウムを行った。岩本が基調講演「家族・日韓・日常学 民俗学を展望する」を発表し、韓国・東國大学の南根祐と、関西学院大学の山泰幸がコメントを行った。

(9) 研究分担者はそれぞれに、海外博物館の民俗学的 日常 展示のあり方を検討するため、Folklife Museum や野外博物館の調査を行った。第1年目は島村恭則が英国でセントファガズ国立歴史博物館、セシル・シャープハウス、ケンブリッジ民俗博物館、ハックニー博物館、運河博物館を、北欧では門田岳久がスカンセン(スウェーデン)、セウラサーリ野外博物館(フィンランド)、中欧ではシュバーベン民俗学博物館(ドイツ)、ザルツブルク野外博物館(オーストリア)などに訪問した。第2年目は島村が北欧における民俗学の展開と現状の課題を検証する目的で、ラトビア野外民族博物館、リガ大学(以上、ラトビア)、トゥルク大学(フィンランド)を訪問し、民俗学的成果の展示や学術誌刊行状況などを把握した。第3年目はコロナ禍で計画は大幅に削減されたが、門田がヨーロッパにおけるアカデミズムの民俗学と博物館展示がいかに連動しているかを調べるため、トロイヒトリンゲン博物館、シュバービエン博物館(以上、ドイツ)、アルクティウム博物館、ルオスタリマキ博物館、農業博物館(以上、フィンランド)を訪れ、資料調査を実施した。これらはいずれ各人の論文等に反映されることになるだろう。

(10) 終年度は新しい民俗学教科書、岩本通弥・門田岳久・及川祥平・田村和彦・川松あかり編『民俗学の思考法 いま・ここ の日常と文化を捉える』慶應義塾大学出版会を、構想し、編集することに終始した。結果、日常学としての民俗学 としての初学者向けのテキストを、研究代表者および研究分担者を中心に作成、2021年3月に出版した。テキストの刊行は、これまで2期に及んだ科学研究会(前期の科研タイトルは「東アジア 日常学としての民俗学 の構築に向けて 日中韓の研究協業網の形成」)の総決算でもあり、いま・ここ にある人びとの「生」を、その生活や日常、文化を、ミクロな視点と同時代の世相や社会との絡みのなかで捉える民俗学 = 「生きる技法」を捉える民俗学として提示してみた。

(11) 日中韓の3か国語による国際学術交流のための研究雑誌『日常と文化』は、蓄積が4号付加されて、第9号まで発刊し、基盤的なプラットフォームとしてほぼ定着したといえる。第8号では日本の若手研究者による新稿を掲載したが、中国から若い研究者(ポストドクター)の新投稿もあり、東アジアの若手民俗学者の間に

少しずつ 日常学としての民俗学 が浸透して来ているのを実感している。本・科研終了後も、引き続き、所属メンバーで刊行してゆくことになった。

(12)最後に多義的な 日常 概念を概括しておく、日常 とは非日常、例えば祭日などと対置される日常だけに限られてはいない。日常 とは未だ主題化されざる領域・視角の総体であり、目録のように付け加わってゆくものであるが、とりあえず、次の4つの群れに分けている。第1群を領域としての 日常、第2群を方法としての 日常、第3群を批判的な視座からの 日常、第4群を当たり前性としての 日常 としているが、第1群の領域としての 日常 には、(a)祭日と対置される日常のほかにも、(b)余暇や消費といったプライベート領域の家族的日常や、(c)家族外的労働の日常(労働者文化)といったような下部区分が含まれる。

このように 日常 は多義的に規定できるし、事実、現象学的社会学をはじめ、他の学問分野でもその対象化を謳っているが、民俗学の 日常 研究の特徴は、そのプロセスを問うところにあると考えている。奇異だったものや新奇だったものが当たり前になっていくプロセスと、当たり前だったものがそうではなくなってゆくプロセスを問い、現在を拘束する歴史性を重視し、視野に含める点に、その学問的特徴があるといえる。

当たり前になるとは、日常化と同義語であるが、当たり前すぎることで、すなわち 日常 は、認識困難性を伴う。当たり前だったモノやコトが稀少化するところで、初めてかつての当たり前を認識できたり、類似したモノやコトの地域的偏差を並べることによって、当たり前が当たり前でないことに気づくような仕掛けをしたのが、日本民俗学の祖である柳田國男が得意とした論法であった。私たちの場合は、現在当たり前なモノやコトが、どのようなプロセスで当たり前になってきたのか、奇異だったものや新奇だったものが当たり前になっていくプロセスにも関心があり、中国や韓国との比較研究も日本の現在の当たり前を浮き彫りにしてくれることに、動機づけられている。

このように 日常 とは、当たり前になるプロセス=日常化を含んだ現働(actual)的な概念として、行為者による状況の構造化を指している。今後も 日常学としての民俗学 を展開、彫琢してゆきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計78件（うち査読付論文 22件 / うち国際共著 2件 / うちオープンアクセス 38件）

1. 著者名 岩本通弥	4. 巻 -
2. 論文標題 当たり前を問う、普通の人びとを描く 民俗学と日常史	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東京大学教養学部歴史学部会編『歴史学の思考法 東大連続講義』岩波書店	6. 最初と最後の頁 151-168
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩本通弥	4. 巻 -
2. 論文標題 ナラティブと主観性の復権 民俗学からの問い	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 岩本通弥編『方法としての 語り 民俗学をこえて』ミネルヴァ書房	6. 最初と最後の頁 1-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩本通弥	4. 巻 25
2. 論文標題 「民俗」概念考 柳田國男が一国民俗学を唱えるとき	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 超域文化科学紀要	6. 最初と最後の頁 153-182
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 岩本通弥	4. 巻 9
2. 論文標題 東アジア民俗学の再定立 日常学としての民俗学 へ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日常と文化	6. 最初と最後の頁 41-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 岩本通弥	4. 巻 -
2. 論文標題 血縁という考え方	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 中込睦子・中野紀和・中野泰編『現代家族のリアルーモデルなき時代の選択肢』ミネルヴァ書房	6. 最初と最後の頁 250-272
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩本通弥	4. 巻 -
2. 論文標題 過去に縛られながら未来に向かう 世相と歴史	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 岩本通弥・門田岳久・及川祥平・田村和彦・川松あかり (編)『民俗学の思考法』慶應義塾大学出版会	6. 最初と最後の頁 23-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 周星	4. 巻 1
2. 論文標題 現代民俗学應該把郷愁與本真性対象化	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 華東師範大学学報	6. 最初と最後の頁 81-88
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 島村恭則	4. 巻 -
2. 論文標題 生きるための民俗学へ 日常とヴァナキュラー	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 岩本通弥・門田岳久・及川祥平・田村和彦・川松あかり (編)『民俗学の思考法』慶應義塾大学出版会	6. 最初と最後の頁 11-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 島村恭則	4. 巻 9
2. 論文標題 ディオニソスとヴァナキュラー 民俗学的視角とは何か	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日常と文化	6. 最初と最後の頁 73-96
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山口輝臣	4. 巻 -
2. 論文標題 アナクロニズムはどこまで否定できるのか 歴史を考えるコトバ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東京大学教養学部歴史学会編『歴史学の思考法 東大連続講義』岩波書店	6. 最初と最後の頁 190-206
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山口輝臣	4. 巻 25
2. 論文標題 広田先生の時代錯誤、三四郎の時代錯誤	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻紀要	6. 最初と最後の頁 115-138
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田村和彦	4. 巻 -
2. 論文標題 モノを使う、モノに使われる	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 岩本通弥・門田岳久・及川祥平・田村和彦・川松あかり (編)『民俗学の思考法』慶應義塾大学出版会	6. 最初と最後の頁 73-84
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 及川祥平	4. 巻 35
2. 論文標題 史跡の形成と地域間交流 山梨県民の長篠・設楽原への関与に注目して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 民俗学論叢	6. 最初と最後の頁 47-61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 及川祥平	4. 巻 254
2. 論文標題 「人生儀礼」考 現代世相への対応に向けて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 成城文藝	6. 最初と最後の頁 1-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 及川祥平	4. 巻 36
2. 論文標題 現代の産育儀礼をめぐる予備的考察	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本常民文化紀要	6. 最初と最後の頁 141-184
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 及川祥平	4. 巻 45
2. 論文標題 害虫と生活変化 ゴキブリへの対処を事例として	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 民俗学研究所紀要	6. 最初と最後の頁 31-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 及川祥平	4. 巻 -
2. 論文標題 災禍と「日常の記録」 宮城県気仙沼市旧小泉村での調査から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 標葉隆馬（編）『災禍をめぐる「記憶」と「語り」』ナカニシヤ出版	6. 最初と最後の頁 269-296
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 及川祥平	4. 巻 -
2. 論文標題 着て、食べて、住まい続ける 生活と衣食住	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 岩本通弥・門田岳久・及川祥平・田村和彦・川松あかり（編）『民俗学の思考法』慶應義塾大学出版会	6. 最初と最後の頁 157-168
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 及川祥平	4. 巻 -
2. 論文標題 新しい生き方と死に方 人生と儀礼	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 岩本通弥・門田岳久・及川祥平・田村和彦・川松あかり（編）『民俗学の思考法』慶應義塾大学出版会	6. 最初と最後の頁 169-179
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 門田岳久	4. 巻 -
2. 論文標題 何も信じられないものがない時代の宗教性 信仰と実践	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 岩本通弥・門田岳久・及川祥平・田村和彦・川松あかり（編）『民俗学の思考法』慶應義塾大学出版会	6. 最初と最後の頁 85-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 門田岳久	4. 巻 -
2. 論文標題 神々の過疎化 地域開発のなかの聖地と政教分離	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 山中弘編『現代宗教とスピリチュアル・マーケット』弘文堂	6. 最初と最後の頁 229-248
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 門田岳久	4. 巻 -
2. 論文標題 民族誌的研究とナラティブ 対話のパフォーマティビティ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 岩本通弥編『方法としての 語り 民俗学をこえて』ミネルヴァ書房	6. 最初と最後の頁 203-234
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 門田岳久	4. 巻 -
2. 論文標題 ヴァナキュラー・スピリチュアリティ 沖縄における聖地経験と 地域 のあいだ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 長谷千代子・別所裕介・川口幸大・藤本透子編『宗教性の人類学—近代の果てに、人は何を願うのか』法蔵館	6. 最初と最後の頁 322-350
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 KADOTA Takehisa	4. 巻 8
2. 論文標題 Telling Stories about Oneself: Reflexivity in Folklore Studies	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日常と文化	6. 最初と最後の頁 49-64
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 岩本通弥	4. 巻 7
2. 論文標題 日本の生活改善運動と民俗学 モダニゼーションと 日常 研究	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日常と文化	6. 最初と最後の頁 15-31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 岩本通弥	4. 巻 299
2. 論文標題 問いかけるドイツの無形文化遺産 ゲルトラウト・コッホ論文の導入として	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本民俗学	6. 最初と最後の頁 70-74
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 周星	4. 巻 2019年第3期
2. 論文標題 三座崑崙山與中国大風水	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 民俗研究	6. 最初と最後の頁 64 81
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 周星	4. 巻 7
2. 論文標題 花火と爆竹 民俗学の「中国問題」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日常と文化	6. 最初と最後の頁 33 53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 島村恭則	4. 巻 7
2. 論文標題 民俗学とはいかなる学問か	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日常と文化	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田村和彦	4. 巻 12巻1号
2. 論文標題 日本の人類学による中国研究の現状と可能性	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ICCS現代中国学ジャーナル	6. 最初と最後の頁 90-95
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田村和彦	4. 巻 2019年第4期
2. 論文標題 墓碑在現代中国的普及和“孝子” 来自陕西省中部農村的案例	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 青海民族大学学报 (社会科学版)	6. 最初と最後の頁 110-121
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田村和彦	4. 巻 -
2. 論文標題 熊本の「郷土料理」としての中国料理「太平燕」から考える 素材、文脈、文化を「囲い込む」こと、開くこと	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 岩間一弘編『中国料理と近現代日本 食と嗜好の文化交流史』慶應義塾大学出版会	6. 最初と最後の頁 149-168
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 及川祥平	4. 巻 -
2. 論文標題 「武田家属将美名録」はなぜ配られたのか ある末裔の歴史実践	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 菅豊・北條勝貴編『パブリック・ヒストリー入門 開かれた歴史学への挑戦』勉誠出版	6. 最初と最後の頁 218-223
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 及川祥平	4. 巻 300
2. 論文標題 民俗信仰研究の動向と課題	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本民俗学	6. 最初と最後の頁 83-96
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 門田岳久	4. 巻 299
2. 論文標題 インターセクションとしてのジェンダー研究 ベア-テ・ビンダー論文に寄せて	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本民俗学	6. 最初と最後の頁 62-69
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 門田岳久	4. 巻 4
2. 論文標題 博物館と住民参加 佐渡國小木民俗博物館にみる地域とのかかわり方 (クリスチャン・ゲーラット訳・ドイツ語)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Working Papers des Japan-Zentrums der LMU Muenchen	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5282/ubm/epub.70287	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 門田岳久	4. 巻 -
2. 論文標題 関係性としての地域開発 佐渡の集落に見る伝統・街並み・再帰性	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 西川克之、岡本亮輔、奈良雅史編『フィールドから読み解く観光文化学 「体験」を「研究」にする16章』ミネルヴァ書房	6. 最初と最後の頁 161-181
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 門田岳久	4. 巻 -
2. 論文標題 工場街の生活世界 大田区・京浜蒲田周辺を歩く	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 立教大学観光学部編『大学的東京ガイド：こだわりの歩き方』昭和堂	6. 最初と最後の頁 43-61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩本通弥	4. 巻 23
2. 論文標題 珍奇なるものから平凡なものへ 柳田國男における民俗学と民族学の位相	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 超域文化科学紀要	6. 最初と最後の頁 27 - 56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 周星	4. 巻 4
2. 論文標題 物質文化研究的の格局與民具学在中国的成長	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 民俗研究	6. 最初と最後の頁 31-50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 島村恭則	4. 巻 6
2. 論文標題 社会変動・生世界・民俗	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日常と文化	6. 最初と最後の頁 27-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 SHIMAMURA, Takanori	4. 巻 129
2. 論文標題 What is Vernacular Studies?	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Kwansei Gakuin University School of Sociology Journal	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Takehisa Kadota	4. 巻
2. 論文標題 Spirituelle Touristen und profane Pilger: Zusammentreffen von Religion und Tourismus an einem japanischen Kulturerbe	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Johannes Moser (Hg.) 'Themen und Tendenzen der deutschen und japanischen Volkskunde im Austausch' WAXMANN	6. 最初と最後の頁 139-159
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 及川祥平、クリスチャン・ゲーラット	4. 巻 6
2. 論文標題 ドイツ語圏民俗学の日常学化をめぐる その経緯と意義	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日常と文化	6. 最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計49件（うち招待講演 38件 / うち国際学会 29件）

1. 発表者名 周星
2. 発表標題 生活革命與民俗学
3. 学会等名 中国・南方科技大学社会科学高等研究院高端學術論壇「民俗学與現代社会」（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 周星
2. 発表標題 洪澤敬三與物質文化研究
3. 学会等名 中国大連外国語大学日本語学院区域国別研究シリーズ講座（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 周星
2. 発表標題 中国文化遺產の人類学研究
3. 学会等名 中国芸術研究院芸術研究所主催当代芸術人類学論壇（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 田村和彦
2. 発表標題 從一個研究者視点来看当代日本民俗学的新動向
3. 学会等名 「民俗学与当代社会」シリーズ學術サロン（中国、南方科技大学社会科学高等ハイエンド學術フォーラム）（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 門田岳久
2. 発表標題 オートモビリティと移動身体 宮本常一にみるフィールドワークの 速度 と現実の知覚
3. 学会等名 日本民俗学会第72回年会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 岩本通弥
2. 発表標題 東アジア民俗学の再定立 日常学としての民俗学 へ
3. 学会等名 実践民俗学会「ポスト帝国の文化権力とヴァナキュラー：民俗学から日常を問う」（翰林大学校）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岩本通弥
2. 発表標題 日韓の無形文化遺産と民俗学 UNESCO条約の対応とその相違
3. 学会等名 東京大学韓国学研究センター（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 周星
2. 発表標題 現代中国的漢服運動
3. 学会等名 韓国延世大学校中国研究院 海外著名学者招聘講演会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 周星
2. 発表標題 民具・民俗文物・民俗博物館
3. 学会等名 中日韓民俗博物館の現状和未来国際學術研討会（中国伝媒大学主催）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 島村恭則
2. 発表標題 ディオニュソスとヴァナキュラー 民俗学的視角とは何か
3. 学会等名 南京農業大学民俗学研究所（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 島村恭則
2. 発表標題 生きる方法 の民俗誌 民俗学から見た「在日」の生
3. 学会等名 韓国民俗学会 2019年度學術大会（ソウル大学校）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 島村恭則
2. 発表標題 ディオニュソス的なものと民俗学
3. 学会等名 第10回国際都市社会フォーラム、華東師範大学社会発展学院（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 島村恭則
2. 発表標題 “民俗学的視角”とは何か ディオニュソスとヴァナキュラーを中心に
3. 学会等名 2019年トップ百大学級学術講座第97回講演会（華東師範大学人文与社会科学研究院）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 島村恭則
2. 発表標題 ディオニュソスとヴァナキュラー 民俗学的視角とは何か
3. 学会等名 実践民俗学会ポスト帝国の文化権力とヴァナキュラー：民俗学から日常を問う（翰林大学校）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田村和彦
2. 発表標題 日本民俗学与物質文化研究 / 博物館的試論
3. 学会等名 「中日韓民俗博物館の現状与未来」学術フォーラム（中国伝媒大学）（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田村和彦
2. 発表標題 中日両国の田野経験与展望
3. 学会等名 「中日人類学学術研究研討フォーラム」（中央民族大学・民族学与社会学学院）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田村和彦
2. 発表標題 現代中国における物質文化の展示の展開と可能性について 国際シンポジウム「中日韓民族学博物館の現状と未来」の経験から
3. 学会等名 日本民俗学会第71回年会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山 泰幸
2. 発表標題 象徴的復興とは何か？ 過疎と災害からの地域復興の事例から
3. 学会等名 愛知大学国際中国学研究センター文化社会研究班主催ミニシンポジウム「現代社会における文化の変容と民俗の復興」（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山 泰幸
2. 発表標題 民話の環境民俗学 人と自然の物語
3. 学会等名 Andong National University海外碩学招聘特講（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 YAMA Yoshiyuki
2. 発表標題 Practice of Using Cultural Resources for Community Revitalization and Disaster Risk Reduction in Depopulated Areas in Japan
3. 学会等名 Andong National University2020 BK21 Plus Project Teams International Conference（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 門田岳久
2. 発表標題 貨幣と礼拝 鑑賞的聖地における入場料と賽銭の あいだ
3. 学会等名 日本宗教学会第78回学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 門田岳久
2. 発表標題 佐渡の霊場と 聖地 の発見
3. 学会等名 新潟大学・佐渡市教育委員会連携事業 シンポジウム「近現代の佐渡と『歴史の場』」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岩本通弥
2. 発表標題 日本と韓国における家族内殺人事件の民俗学的分析 親子心中と介護殺人を事例に
3. 学会等名 第2回北大医学人文国際会議（中国・北京大学医学部）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 周星
2. 発表標題 対話民衆 『民俗語彙』與郷土知識
3. 学会等名 北京大学「從啓蒙民衆対対話民衆 記念中国民間文学学科100周年国際学術研討会」（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 周星
2. 発表標題 財産・遺産・資源・ゴミ 關於『断舍離』及『物』的去向（中国語）
3. 学会等名 南方科技大学社会科学高等研究院、台湾中央研究院民族学研究所共催：「物、文化遺産與生活方式」（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田村和彦
2. 発表標題 日本の人類学による中国研究の現状と可能性
3. 学会等名 日中平和友好条約締結40周年記念 第31回愛知大学国際中国学センター(IGCS)シンポジウム（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田村和彦
2. 発表標題 民俗学からハワイの日系人墓地を考える その1
3. 学会等名 日本民俗学会第70回年会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 島村恭則
2. 発表標題 社会学一級学科下の民俗学：日本・関西学院大学為例（中国語）
3. 学会等名 社会学一級学科下の民俗学教学体系（北京師範大学・華東師範大学・山東大学共同開催）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山 泰幸
2. 発表標題 災難と日韓関係 ポスト帝国の文化権力という視点から
3. 学会等名 韓国日本学会 第7回国際学術大会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山 泰幸
2. 発表標題 地域存亡とまちづくり
3. 学会等名 日本地方自治研究学会 第35回全国大会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山 泰幸
2. 発表標題 「生・老・死を語る」とは何か
3. 学会等名 第2回北京大学医学人文研究院国際会議（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山 泰幸
2. 発表標題 シルクロードと近代日本 研究史の概観と思想史的背景
3. 学会等名 中国社会学学会中日社会学専委会2018年年会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山 泰幸
2. 発表標題 地域住民による主体的なまちづくり
3. 学会等名 2019年度東亜大学校人文力強化事業団海外学者招聘特講（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山 泰幸
2. 発表標題 災害復興支援と東アジアの国際協力
3. 学会等名 2019年韓国日本政経社会学会 国際学術大会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 門田岳久
2. 発表標題 久高島における巡礼ツーリストとヴァナキュラーな宗教性
3. 学会等名 日本宗教学会第77回学術大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小西公大・門田岳久
2. 発表標題 予測＝期待をめぐるエスノグラフィの可能性と有限性 宮本常一写真プロジェクトの自己分析から
3. 学会等名 日本文化人類学会第52回研究大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計18件

1. 著者名 岩本 通弥、門田 岳久、及川 祥平、田村 和彦、川松 あかり編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 慶應義塾大学出版会	5. 総ページ数 272
3. 書名 民俗学の思考法－ いま・ここ の日常と文化を捉える	

1. 著者名 岩本 通弥編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 380
3. 書名 方法としての 語り 民俗学をこえて	

1. 著者名 島村 恭則	4. 発行年 2020年
2. 出版社 平凡社	5. 総ページ数 272
3. 書名 みんなの民俗学 ヴァナキュラーってなんだ？	

1. 著者名 岩本通弥・松前もゆる・門田岳久・大堀文編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 東京大学教養学部文化人類学教室	5. 総ページ数 211
3. 書名 団地暮らしの人類学－北区・赤羽台団地	

1. 著者名 周星	4. 発行年 2019年
2. 出版社 商務印書館	5. 総ページ数 361
3. 書名 百年衣装 中式服装の譜系與漢服運動	

1. 著者名 周星	4. 発行年 2019年
2. 出版社 商務印書館	5. 総ページ数 300
3. 書名 道在屎溺 当代中国的厕所革命	

1. 著者名 島村 恭則	4. 発行年 2020年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 256
3. 書名 民俗学を生きる	

1. 著者名 島村恭則、高岡弘幸、川村清志、松村薫子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 226
3. 書名 民俗学読本 フィールドへの誘い	

1. 著者名 島村恭則、桑山敬己、鈴木慎一郎	4. 発行年 2020年
2. 出版社 民俗苑	5. 総ページ数 144
3. 書名 文化人類学と現代民俗学（ハンゲル）	

1. 著者名 及川祥平・川田牧人編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 成城大学民俗学研究所	5. 総ページ数 96
3. 書名 ドイツ民俗学との対話	

1. 著者名 岩本 通弥・山下 晋司編、郭 海紅編訳	4. 発行年 2018年
2. 出版社 山東大学出版社	5. 総ページ数 363
3. 書名 民俗、文化的資源化：以21世紀日本為例	

1. 著者名 周 星・王 霄冰編	4. 発行年 2018年
2. 出版社 商務印書	5. 総ページ数 1021
3. 書名 現代民俗学的視野與方向－民俗主義・本真性・公共民俗学・日常生活（上・下巻）	

1. 著者名 小倉 慈司・山口 輝臣	4. 発行年 2018年
2. 出版社 講談社	5. 総ページ数 400
3. 書名 天皇の歴史9 天皇と宗教	

1. 著者名 山口 輝臣編	4. 発行年 2018年
2. 出版社 山川出版社	5. 総ページ数 288
3. 書名 戦後史のなかの「国家神道」	

1. 著者名 山口 輝臣編	4. 発行年 2018年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 272
3. 書名 はじめての明治史	

1. 著者名 鳥村 恭則・桑山 敬己・鈴木 慎一郎	4. 発行年 2019年
2. 出版社 風響社	5. 総ページ数 100
3. 書名 文化人類学と現代民俗学	

1. 著者名 山 泰幸	4. 発行年 2019年
2. 出版社 KADOKAWA	5. 総ページ数 240
3. 書名 江戸の思想闘争	

1. 著者名 及川 祥平・加藤 秀雄・金子 祥之・クリスチャン ゲーラット編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 成城大学グローバル研究センター	5. 総ページ数 218
3. 書名 東日本大震災と民俗学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>日常学としての民俗学 http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/alltag/</p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	周 星 (Zhou Xing) (00329591)	神奈川大学・国際日本学部・教授 (32702)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	島村 恭則 (Shimamura Takanori) (10311135)	関西学院大学・社会学部・教授 (34504)	
研究分担者	山口 輝臣 (Yamaguchi Teruomi) (20314974)	東京大学・大学院総合文化研究科・准教授 (12601)	
研究分担者	山 泰幸 (Yama Yoshiyuki) (30388722)	関西学院大学・人間福祉学部・教授 (34504)	
研究分担者	及川 祥平 (Oikawa Shohei) (30780308)	成城大学・文学部・専任講師 (32630)	
研究分担者	田村 和彦 (Tamura Kazuhiko) (60412566)	福岡大学・人文学部・教授 (37111)	
研究分担者	門田 岳久 (Kadota Takehisa) (90633529)	立教大学・観光学部・准教授 (32686)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計3件

国際研究集会 「家族・日韓・日常学 民俗学を展望する」	開催年 2021年～2021年
国際研究集会 「ポスト帝国の文化権力とヴァナキュラ 民俗学から日常を問う」(韓国・翰林大学校)	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 日本民俗学会第70回年会ドイツ民俗学会共催国際シンポジウム「ドイツ民俗学の最前線」	開催年 2018年～2018年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
ラトビア	リガ大学	ラトビア野外民族博物館		
フィンランド	トゥルク大学	セウラサーリ野外博物館	アルクティウム博物館	他2機関
韓国	翰林大学校日本研究所HKプラス研究事業団	実践民俗学会	東國大学校達磨研究所	他1機関
中国	華東師範大学民俗学研究所	南方科技大学社会科学高等研究院	北京大学医学人文研究院	他3機関
ドイツ	ドイツ民俗学会	ミュンヘン大学ヨーロッパ民族学研究所	ミュンヘン大学日本学研究所	他3機関
スイス	チューリッヒ大学			
英国	セントファガンズ国立歴史博物館	セシル・シャープハウス	ケンブリッジ民俗博物館	他2機関
オーストリア	ザルツブルグ野外博物館			
スウェーデン	スカンセン			